



Title	〈意識〉研究の最近の動向について : John R. Seale, <i>The Mystery of Consciousness</i> , New York Review of Books (1997) を手がかりとして
Author(s)	松本, 明子
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 277-282
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25875">https://doi.org/10.18910/25875</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ◇研究ノート◇

### 〈意識〉研究の最近の動向について――

John R. Searle, *The Mystery of Consciousness*, New York Review of Books (1997) を手がかりとして

松 本 明 子

意識 (consciousness) は、ひとつの顕著な領域横断的研究テーマである。近年、哲学、心理学、認知科学はもとより、かつては「意識など研究対象として不相応」と考えていた神経科学までもが中心的に取り扱うようになったことは、このテーマの性格をよく語っている。

本稿では哲学者サール (John R. Searle) の著書 *The Mystery of Consciousness* (1997) を題材に、〈意識〉研究の最近の動向を概観すると共に、サールの見解を確認する。本書はサールが一九九五年から一九九七年の間に *The New York Review of Books* に掲載した論文を基に、各分野の意識に関する主要な議論をまとめたものである。従って、本稿はあくまでもサールの目を通した研究動向のレポートを筆者が再構成したものであり、〈意識〉研究の動向の全体像を伝える点では（いわば二重の）制約がある。しかしサール自身が現在も継続して意識研究に取り組んでいることから、当該研究への彼のスタンスを明示するドキュメントとしても本稿の意義は是認されよう。

さて、本書を貫通しているサールの主張は「意識は消化や光合成と同じく、生物学的プロセス」であり、「脳が意識を引き起こしている」点に収束する。この堅牢な立場は特に第一章と結論の章で明白にまとめられているのだが、第二章から第七章は、意識に関する議論をそれぞれの分野で展開している六人の研究者を各章で一人ずつ取り上げ、各々の主張についてサールが批評を加えている。まことにそれらの概要を順次みていこう。

第二章で取り上げられてくるのはクリック (Francis Crick) の議論である。The Astonishing Hypothesis: The Scientific Search for the Soul (1) の中で、クリックは脳がいかに機能しているのか、われわれの意識経験のすべてをニューロンの振舞いで説明できるとする、最もシンプルで直接的な見解を示している。特に意識の問題への切り口として視覚を取り上げたことにより、脳の機能を要約したというだけでなく、それを心理学や認知科学など多くの関連分野の研究と統合し、他分野とのニューロンネット・モデリングにコンピュータを使用した点をサールは高く評価している。しかし同時に次の三つの「実に深刻な」哲学的誤りを指摘している。

一つはクリックがクオリアの問題を誤解していることである。彼はクオリアの問題を意識の問題の一側面として捉えているが、サールはクオリアの問題は意識の問題そのものであるとする。

二つ目はクリックが意識をニューロン発火に還元するという点で、因果的発生主義を実践しながら除去的還元主義(eliminative reductionism)を説いているという矛盾を犯していることである。つまり、意識の非還元性に関する議論は認識論ではなく存在論の問題であり(2)、例えば痛みをニューロン発火に因果的に還元することはできるが、それは存在論的還元ではないのである。故になぜ痛みを感じるのか、因果的見解を示すことはできるても、痛みが存在しないことを示すものではない。

三つ目はクリックの説明は論理的構造が不明瞭なことである。脳のプロセスがいかにして視覚を作り出しているかについて因果的説

明を行わず、専ら意識の「相互関係」を模索しているところのがクリック流の言い回しである。これでは稻妻の光と雷鳴の音の関係のように、相互的であるが因果的理論はなく、説明ができない。同様に視覚の経験と世界の実体との関係についての説明もサールによれば不明瞭であるという。

クリックは哲学を軽蔑する代償にこのような哲学的誤りを犯しているが、そうした部分を読み飛ばしても、彼の視覚の心理学と脳科学についての知識は受け取るに足るものとサールは評価している。

第三章では、サールが「最も印象深く深遠なる研究」と賛辞するエーデルマン (Gerald Edelman) の議論(3)が扱われている。エーデルマンは意識の理論を説明するに当たって、脳内地図、神経細胞群淘汰説、再入力、原意識という中心的概念・理論を用い、知覚カテゴリーや意識の一般的な問題に拡張しようとしている。彼の見解では、意識を持つために、脳はカテゴリー化のシステムと、必要なことを身につける学習システムと、ある種の記憶を有し、自身とそれ以外の世界を識別できなければならず、さらに出来事を時系列的に並べることができる構造がなくてはならない。そして何よりも、脳がこれらの解剖学的構造と結合する全体的な再入力経路を必要としていることが重要である。

とりわけサールが最も魅力的なものの一つとして評価しているのが、精神分裂症といった主たる精神疾患がいかにして再入力メカニズムの崩壊の結果となるのかについてのエーデルマンの考察である。と同時に、この問題はいかにしてこれらの構造や機能から、われわ

れが皆持っている感覚や気付きの質的状態（これを「クオリア」と呼ぶ哲学者もいるが、意識とクオリアが別個の現象であるかのような誤った印象を与えるとサールは懸念する。彼曰く、質的で、主観的で、経験であるすべての意識現象はクオリアそのものである。）へ至るのか？という既出の問いに回帰する。とまれ、量子メカニズムから精神分裂症に至るまで、非常に博識なテーマについて議論し、脳内のどの神経構造がどの機能を担っているのかを特定しようと詳細に試みるエーデルマンの洞察に、サールは驚嘆するのである。

しかし第四章で扱うペンローズ (Roger Penrose) の *Shadows of the Mind: a Search for the Missing Science of Consciousness*<sup>(1)</sup> に、  
「ここでは、『ゲーテルの定理と量子論を明確に説明した唯一の書』と評しつつも、意識については学ぶところがない」と一蹴する。ペンローズは数学者として、ゲーテルの定理を用いて意識がコンピュータ上にシミュレートできないことを証明しようとしているが、これは意識のすべてをシミュレートできるわけではないことを示したに過ぎないし、後半部の非コンピュータ演算的量子力学の新しい見解（量子重力論）が意識の問題に解決策を与えるという主張も、ヨリ一ヶだが不明確であるとサールは指摘する。

また、第五章に登場するデネッシュ (Daniel C. Dennett) が *Consciousness Explained*<sup>(2)</sup> で展開する「意識状態は存在しない」という主張に対して、その前提となっている①科学的実証は常に三人称的視点を有する、②そのように解釈される科学的実証によって証明できないものは存在しない、という2点が彼の最も深刻な誤りで

あり、その他の誤りの根源であるとサールはいう。あるいは、章末に採録されたデネットとの往復書簡において、両者の間にある相違点をさらに明確化しつつ、徹底的に論駁を加えている。何よりも、本章のタイトルにデネットの書名をもじって “Consciousness Denied” とつけていることから、サールのデネットに対する皮肉を見て取ることができるよう。

さらに、第六章で取り上げたチャーマー (David Chalmers) の *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*<sup>(3)</sup> に至り、  
「はじめを「今日の認知研究における」一つの絶望の兆候」と呼んではばかりない。チャーマーは機能主義と特性二元論 (property dualism) を結合する、非還元的機能主義を唱道し、「意識は脳の機能構成によって生まれるが、機能的状態ではない」、「認知は機能的説明づけができるが、意識はそのような方法では説明できない」と主張する。機能構成とは、刺激の入力に始まり、行動の出力によって終わる、物理的因果のパターンを指す。彼にとって機能構成それ自体は意識ではなく、意識は機能構成に付加されるべきものである。そしてこの意識を引き起こす仕事をするのが情報である。チャーマーのいう情報とは、常識的な意味合いの情報ではなく、世界のあらゆる物理的差異を生む差異が情報であり、この拡張された情報理論的意味合いにおいては、地面を打つ雨も（地面を変化させているので）情報を含んでいることになる。情報のあるところに意識が引き起こされるのであるから、チャーマーの例ではサーモスタッフにも意識があることになる。脳が意識的になりうるなら、何故サーモ

スタッフが意識的になりえないのだろうか?—というのがチャーマーズの弁である。これに対してサールは、このような滑稽な結果を導かざるを得なかつたすべての根源は、チャーマーズが現代の機能主義であるコンピュータ機能主義<sup>(1)</sup>と特性二元論の「奇妙な結婚」を無理に推し進めたことにあると指摘する。そしてわれわれは陳腐なデカルト用語と一連のカテゴリーを踏み越えなければ、意識については明らかに誤謬に陥ると警告する。こうした両者の見解の違いは本章付録の往復書簡においてさらに明らかとなる。チャーマーズはサールの指摘に各々反論している<sup>(2)</sup>が、中でも我慢ならないのはサールが「脳は意識を引き起こす」という呪文を唱えてばかりで、何ら問題を解決できないことらしい。対するサールは脳が生物学的臓器であり、意識が生物学的プロセスであることは自然の事実に過ぎず、意識を理解するためには脳がそれをどのように行っているかを詳細に明らかにすることが重要であると説く。

第七章ではこれまでの誰とも違つアプローチを取る、ローゼンハイル<sup>レ</sup> (Israel Rosenfield) に注目してくる。彼の著書 *The Strange, Familiar and Forgotten: An Anatomy of Consciousness*<sup>(3)</sup> は神経損傷のさまざまな症例から、意識についての考察を推し進めている。エーデルマンの同僚であつた彼は、同じく意識と記憶の結びつきを強調しているが、さらに「身体イメージ」という概念を導入して意識の自己認識を説明している。意識について練り上げた理論を提示するのではなく、意識の一般的な資質の指摘を目的としたこの著から、サールは身体経験を意識の全形式の照準点として考えることと、

そしてすべての意識が身体イメージを介して身体経験と共に始まる

ことを重く受け止めている。

さて、以上の第二章から七章における批評を総括すると、その前後2章において繰り返されるサールの主張はおのずと明らかである。サールが支持するのはクリック、エーデルマン、ローゼンハイールの見解に共通する「(おそらくニューロン、シナプス、ニューロン群のレベルで) 脳のプロセスが意識を引き起こす」という主張であり、デネット、チャーマーズの「脳は意識を維持しうる情報処理装置の一種である」という主張には真っ向から対立している。その根拠は何よりも、意識が消化や胆汁の分泌と同じく生物学的現象であるという事実にあり、これはいかなる哲学的立場からも独立した自然だと見なしていることに尽きる。というのも、脳のプロセスがわれわれの意識状態を引き起こしていることは、神経生物学の貢献により議論の余地がない既知のものであり（故にデネットやチャーマーズとの）のレベルで議論しなければならないことに、サールは明らかに辟易している（よって今のわれわれに求められていることは、どのように脳が心的営みを因果づけ、構築し、組織化しているのか、神経生物学レベルで明らかになっていること、現在なりつたことに、理論付けを施すことであるとサールは強調する。そのためにも、旧来のデカルト的カテゴリーを乗り越え、唯物論でも特性二元論でもない、新たな境地を開こうとするサールの強い意志が、全編を通して脈々と流れているのが感じられるであろう。

では、その理論付けのために期待できる方策とは何か？サールは

無意識の考察から意識に迫るアプローチが望ましいと考えている。その例として挙げられているのが盲視 (blindsight) の臨床研究 (19) である。盲視とは、脳内出血などで大脳皮質の一部分の機能を失った人達がもつ、見えないのに、見えるという不思議な感覚のことである (1)。例えば、患者D.B.は視覚野の損傷により一部視界が欠けている。ところが、スクリーン上に点滅する文字を推測する (guess) ことができるのである。どうしてそんなことができるのか、医師に尋ねられたD.B.はこう答える・わからないよ。だって見えないんだから。物はまったく見えないんだ。

この実験から、サールは意識の問題に切り込むために、いくつか興味深い問い合わせている。患者は意識的な視覚の場合も盲視の場合も同じ情報を受け取っているようだが、では、神経生物学的な

かに出来れば、脳が意識を引き起こすメカニズムも特定できるのではないか?——この辺りの動向は、今後筆者も期待をもって見守りたいと思う。

最後に、意識の問題は、生命と同じく、意識を生物学的問題としてわれわれが解決する時に、何がという mystery を問うのではなく、どのようにという problem の段階に次第に移行しているであろうことをサールは予見して結んでいる。筆者としては、サールが呈する「脳のプロセスはどのようにして意識を引き起こしているのか?」という問い合わせ生物学的側面を重視しつつも、同時にこの問い合わせが哲学的問題を多分に負っていることを強調しておきたい。後にサールが

生物学的自然主義 (biological naturalism) と命名する (E.) の見解は、二元論と唯物論を明快に拒絶する。それは、心身を二つの形而上学的領域として扱う哲学の伝統に対する挑戦状にほかならない。つまり、生物学的自然主義を唱道することにより、サールはこれまで蓄積されてきた、あらゆる哲学的立場を敵にまわしたことになる。そこで彼は自身の負うべき説明義務を果たそうと、さまざまなる用語を用いて議論を展開する。ところが、皮肉なことに、その過程でサールが「心 (mind)」という語を口にした途端、われわれの理解は彼が嫌悪するデカルト的カテゴリーに縛られてしまうのである。何故なら、そもそも心身問題が未解決の問いであり、何よりもわれわれは二元論でない意味合いの「心」を表す言葉（あるいはカテゴリー）と言つてもいい）を未だ持ち合わせていないからである。

三

- (一) 1994. New York: Maxwell Macmillan Intl. (クニッカ) 一九九五  
『DNAに魂はあるか：驚異の仮説』 中原英臣ほか訳 東京：講  
談社)

(二) いの点に関する議論はネーベル、クリップキ、シャクソン、サール  
ムの間で進行中である (Searle, 1997, p. 30. 参照)。

(三) いわゆる本草では 1989. *The Remembered Present: The Biological  
Theory of Consciousness*. New York: Basic Books / 1992. *Bright Air,  
Brilliant Fire: On the Matter of Mind*. New York: Basic Books.  
(ハーパーラン) 一九九五『脳から心へ：心の進化の生物学』 金子  
蔵著訳 東京：新曜社) の二冊に記及している。

(四) 1994. New York: Oxford UP. (マローリー: 1001 1001)

『心の影：意識をめぐる未知の科学を探る』(土・ト) 林 一誠 東京：みやま書房)

Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford UP.

(15) 1993. New York: Penguin. (ド・ベイ・ル 一九九八『解明されぬ意識』

「口説同訳 東京：青土社)

(16) 1997. New York: Oxford UP. (チャーチー 1100 『意識の根柢精神の根本理論を求めて』林 一誠 東京：日講社)

(17) 脳の機能状態がロバーツの演算状態に似てこないかと提唱された見解。機能主義を支持する認知理論家の間でロバーツ・トナロジーはたびたび議論されただが、近年に至りのトナロバーの妥当性を疑う論調が強まる。(Lakoff 1987, Lakoff and Johnson 1999, Langacker 1991; Searle 1992)

(18) チャーチーはその著書にねじてチャーチーの主張や思考実験に異を唱へてこなす (Chalmers, 1997. p. 258, 314, 316, 322-27 など)

(19) 1993. New York: Vintage.

(20) Weiskrantz, L. 1986. *Blindsight: A Case Study and Implication*. New York: Oxford UP. 参照。

(21) 茂木健一郎 (一九九九年一〇月一〇日) 「意識のナ・ハ」 第六回：「見えないこの世界の知覚」日本経済新聞 (<http://www.qualia-manifesto.com/nikkai.html>) 参照。

(22) Searle. 1999. 参照。

参考文献 (ローマー・チャーチー・トナロジーのほか、意識の問題にむかう用ひるべく)

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. & Johnson, M. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.